

## 第26回中世哲学会大会シンポジウム報告

### 論題：存在と分有

——トマス・アキナスとドゥンス・スコトゥスを中心にして——

司会 東京都立大学 加藤 信朗

提題：トマスのアイデア論と残された問題

京都大学 山田 晶

提題：『分有』と言われるもの

東京大学 井上 忠

(1977.11.13. 於 京都産業大学)

司会 加藤 信朗

1966年、第一回国際ドゥンス・スコトゥス会議（オクスフォード，エディンバラで開催）の席上，F. フェン・ステーンベルヘンは「ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス登場前夜の哲学（La philosophie à la veille de l'entrée en scène de Jean Duns Scot）」と題する講演の中で，トマス・アキナスとボナヴェントゥラの死没(1274)とヨハネス・ドゥンス・スコトゥスの死没(1308)を隔てる僅か1/3世紀の時期は思索の歴史にとって中世紀の中でひとを最も魅了する時期である，それはこの時期の内に一見ひとを困惑させる一つの謎を解明するための鍵が秘められているからである，その謎とは，熾天使博士と天使博士によって彫琢された壮大な総合体系が，精妙博士によって短時日の内に構築され，しかも，両者のいずれとも根柢から相違する総合体系へと移行した際，そこに経過した教説の展開には如何なるものがあったのかということである，という意味のことを述べている（cf. *Studia Scholastico-Scotistica I: De Doctrina Ioannis Duns Scoti [Acta Congressus Scotistici Internationalis, Oxonii et Edimburgi 11-17 Sept. 1966 celebrati]* vol. I p. 65-74, Romae

1968)。この老碩学、とりわけ、十三世紀の思想史の解明に一生の努力を傾注してきた老師の言葉のもつ意義はいまなお重い。それはわが国の研究者にとどまらず、およそ、あらゆる研究者にとって、ただに思想史研究という観点からみるにとどまらず、哲学そのものの探究にとって、真摯な究明を求める間である。なぜなら、この点の究明に、近世哲学は何であったか、また、これに対する中世哲学は何であったかを究明するための手掛りの一つが含まれており、ひいては、現代・近世の哲学の問題と中世の哲学との繋がりがこの究明によって浮び上ることによって、中世哲学の問題を現代に生きるわれわれの問題として思索し抜くことが迫られることになるからである。今回のシンポジウムは前二回のプラトニズムの問題を継承し、しかも、上述の問題点、すなわち、トマスとドゥンス・スコトゥスの間にあるものという問題点に絞られて行なわれた。「存在と分有」——それは中世の思索にとっては「創造と分有」というのと同じである——という問題は遠くプラトンの思索に発し、教父時代、および、中世紀の思索の諸階程に多彩な影を投げ続けてきた問題であるが、ここ、中世紀における二人の最大の思索者にとっても最も重要な問題の一つであり、しかも両者の把握の間には微妙なニュアンスの相違を越えて、思索の深淵を窺わしめるような、何か思索そのものの在り方の深刻な相違が顔を覗かせているように仄知される。それはプラトンそのものの思索をどこで捉えるかの違いともなろう。今回、お二人の提題者はこの問題点について、それぞれの見解を御自身の哲学把握にもとづいて、余すところなく、かつ、大胆と言えるまでに、披瀝された。今回のシンポジウムはこれを以てすでに期待に足る十分な成果を収めたと司会者には信じられる。提題の趣旨を要約するのは司会者の責めではないであろう。論点の大綱は以上に掲載されてある御兩人による摘要にあるとおりでである。時間の制約ゆえ、提題後、討論が充分になされなかったという事実が指摘されよう。しかし、発言なさらなかった会員も、発言なさった会員も含めて、このシンポジウムに参加された会員の不断の注視と内心の討論への参加が今回のシンポジウムを十分な成果へと導きえていると信ずる。おもうに、シンポジウムの成功とは会場で出来上がった討論の完成態に求められるべきではなく、それが参会者の内に問題意識を喚起し、その後長く参会者各自の内において、あるいは、互いに相寄って、多様に追求される場所にあると考えられるからである。ただ、当日の討論の一端を示すため

に、発言なされた方と発言なされなかった方から各一名ずつ、質問の形で見解を呈示して下さいました。これは本記録の末尾に掲載されている。

## 提題 トマスのイデア論と残された問題

山 田 晶

1. トマスのイデア論を理解するためには、その前提をなす神、創造、及び神の認識についてのトマスの所論を知らなければならない。

第一に、神について。トマスの神はエッセである。それは「がある存在」といったようなものではなく、すべての完全性を自らのうちに卓越せるあり方において包含している完全性の充満としてのエッセである。それは生命 *vivere* も知性認識 *intelligere* もその最も完全なあり方において包含している。すなわち神は、単に生きている、知性認識するというだけにとどまらず、まさにそのエッセがすなわちその生であり知性認識である。

神のエッセは純粹現実態 *actus purus* である。それは最もすぐれた仕方での現実的活動においてある。神のはたらきは、自己のエッセを自己の外に溢出し、他者にエッセを与え、他者をしてエッセせしめることにおいてあらわれる。

神のエッセは無限である。神はそのエッセと区別され、そのエッセを限定する原理としてのエッセンチヤを持たない。神においてはそのエッセがすなわちエッセンチヤである。

2. 第二に、創造について。創造とは、上述の如く、神が自己のエッセを他者に与え、他者をして独立にこの世界にエッセせしめるはたらきである。しかし他者にエッセを与えるといっても、神からエッセを受ける以前に何らかの他者が既に存在していて、そのものが神からエッセを受けるのではない。神からエッセを受ける以前においては、他者なるものはこの世界に全然存在していなかったのであり、全く何もないところに、神はそのものの「全エッセ」*totum esse* を与えて、そのものをそのものとして存在せしめたのである。すなわち、無から創造したのである。